

## はじめに

中尾 央・松木武彦

### 日本考古学と自然科学のあいだ

これまでの日本考古学において、自然科学的アプローチは決して稀なものではない。たとえば『日本考古学』（もしくはその前身となる『考古学雑誌』）や『考古学研究』のような学会誌を見渡してみれば、初期には藤原宏志らによるプラント・オパールの研究（一九七六年）、広岡公夫による古地磁気研究（一九八一年）、東北大学のチームによる石器使用痕の実験考古学的研究（梶原・阿子島 1981）などが見つかるところ。近年では、炭素14年代法や年輪年代法による年代測定、酸素同位体法などによる古環境復元、人間を含む動植物遺体の同定や分析などがさかんに行われ、そのような作業の成果を参照しない遺跡の調査報告はむしろ珍しいほどである。

しかし、日本考古学の学是とされてきた日本列島の歴史叙述に、それらがどれほど主流的に盛り込まれているかという点では疑問が残る。その大きな要因は、上記の自然科学的アプロ

子の多くは人工物そのものに対してではなく、それを取り巻く環境や、そこに二次的に残された痕跡など、もっぱら周辺の現象に限定されている点にある。人工物そのものの様態を歴史叙述に置き換えるための「中間理論」に当たるものは、日本考古学の場合は「型式学」であるが、ここに自然科学的アプローチの要素が組み込まれてきたことはなかった。日本考古学の「型式学」は、古くからの研究者の徒弟主義的学習と経験的直観とがないまぜになった一種の技法であり、非言説的・非体系的であって、その意味で「学」と呼べるようなディシプリン性はなく、せいぜい「型式論」といった程度の呼び名がふさわしい。

「型式学」のこのような限界を克服するために、数理的手法に基づく考察の試みは、少数ではあるがなされてきた。第3章で紹介する古墳を対象とした数理的手法（小沢 1978）、上野佳也によるいくつかの試み（上野 1963: 1981）、また須藤隆による土器の考察（須藤 1973）などが数少ない例外である。

たとえば、上野（1963）は東日本縄文時代の石鏃に関して長さと幅を計測し、その平均値を統計的に検定し、各地域で形態に有意差が見られるかどうかを考察している。また石鏃であれば、『人類学雑誌』における埴原・岡村（1981）も（上野よりは多少込み入った方法をもちいているが）ほぼ同内容の研究である。須藤（1973）では、ある型式の土器が各地層にどのように分布しているかを明らかにするため、異なる型式の土器の数について、層序間で統計的検定を行っている。小沢の研究については第3章を参照してほしい。

ただし、こうした研究は実際のところ、かなり入門的な統計手法を使用しているにすぎない。もとより、日本考古学のさまざまな概説書において、数理的手法は繰り返し紹介されてきたし（寺田 1963、及川 1985）、また及川と小沢もオルトンの『数理考古学』（1987）を訳し、考古学における数理的手法の紹介を試みてはいるが、こうした数理的手法をもちいた考察は、日本考古学の中で主流に食い込むどころか、数十年前に比べて微増している程度のように見える（あるいは、もしかするとほとんど変わっていないのかもしれない）。

さらに、数理的手法がよって立つ自然科学的アプローチは、進化科学という、自然・人文の違いを超えて科学に通底する国際的なパラダイムを基礎としている。ところが、考古学を含む日本の人文学においては、「進化」というキーワードはきわめて古典的な偏見や曲解に基づき、妙な価値観を織り込んだ独特の用法が因習化して、一部の極端な例では、むしろそこからの脱却が必要であるかのような主張がなされることすらある（川西 2015）。このような風潮のもとで、「学」とは異質な「技芸」としての型式学が固持され、数理的手法を含む自然科学的アプローチの中心化が阻まれているといえよう。

### 「あいだ」を埋めるべき理由

では日本考古学はこのまま、数理的手法を代表とする自然科学的アプローチ、およびそれによって立つパラダイムとしての進化科学と距離をおいておくべきなのだろうか。われわれの答

えは明らかにノーである。これまでに蓄積されてきたデータの量や近年進展したデータのスタイルはもはや、誰か一人、もしくは複数の人間の共同作業であっても、技芸的な直感的叙述が太刀打ちできる閾値をはるかに超えてしまっている。

寺田 (1983) が言うように、大量のデータを「直感」だけで処理しようとすれば、その処理の背後にある前提が明らかにされないまま、噛み合わない議論が進んでいくだけである。遠賀川式土器の起源をめぐる議論はそのよい例だろう。どの特徴 (第2章で触れられるような外傾・内傾接合など) が遠賀川式土器の起源を説明するのに、どのように重要なのか。各研究者が重要とみなす特徴を重視するあまり、噛み合わない議論が展開されてきた点は否めない (cf. 藤尾 2002)。数理的手法では、こうした前提を明らかにし、どの前提にたつてどのようにデータを見れば、いかなる結論が見えてくるか、その手順を明確にして考察を進められる。

実際、日本考古学でもさまざまな形でデータの体系的整理が進んでいる。日本旧石器学会のデータベースなどはその好例だろう (<http://paleolithic.jp/data/index.htm>)。こうした膨大なデータをじっと眺めていれば、何かしら傾向性のようなものが見えてくるかもしれない。しかし、見えてきた傾向性がデータ全体の中で成立しうるものなのかどうか、すなわち、一部のデータだけに基づいた傾向性でないかどうか、それを突き詰めようとすれば、データが大きくなればなるほど、何らかのかたちで、数理的手法を用いて処理せざるをえないだろう。

もちろん、数理的手法を導入しても考古学の伝統的作業が不要になるわけではない。特に数理

的手法で分析・整理された結果をどのように解釈するか、その点に関しては数理的手法では判断できない。したがって、及川（1985, p. 289）の言葉は今でも十分に生きている。「数量的研究では考古学データからそれらを解釈するための情報を引き出すために数量的手法を利用するのであって、考古学的解釈までをも導き出そうとしているのではない」。

こうしてみると、数理的手法を採用すべき根本的理由は五〇年前、三〇年前とほとんど変わりが無い。変わったのは、その理由の背景である。数十年前に比べてはるかに大量のデータが蓄積される一方、日本考古学ではそうした膨大なデータの整理と分析をなおざりにしてきたらしいがある。典型例の一つが第2章で触れる古墳、そして第4章で触れる古人骨データだろう。これらの巨大データを整理・分析し、何が見えてくるかを明らかにしておかなければ、今後新たに取得されるデータの理解も、偏りかねない。また、これまでの議論が果たしてデータ全体を見渡してみたときにどう評価されるのか、そうした再検討も重要だろう。本書の試みは、こうした時代的背景に後押しされたものでもある。

日本考古学が数理的手法を避けてきた直接的な理由はさまざまに考えられる。多くが指摘するように、アメリカで推進され、科学的手法を大胆に導入しようとするプロセス考古学が日本考古学へ与えた衝撃、そして人文学・歴史学としての考古学を重視する日本考古学が見せたその衝撃への反発は、歴史的には十分理解できる（近藤他 1986）。しかしこうした歴史的文脈に固執して、数理的手法に目を背けたまま、日本考古学が健全な状態でいられるわけもない。

少なくとも、どのように数理的手法をもちいて研究していくべきかについての議論は必要だろう。失われた数十年を取り戻すべきときが来ているのである。

## 考古学の文化進化

第1章で井原が述べているように、現代の文化進化研究はある種の「文化の科学」（3頁）である。そして伝達される文化が「集団の多様性の構成を変化させる作用をもつ」という意味において、文化が「進化」すると考えている（7頁）。先に述べたように、このような考察は、遺伝子の説明が飛躍的に進んだ後、国際的に飛躍的な進展を遂げた進化科学のパラダイムに立脚したものである。日本における「進化」という概念の因習的理解（川西 2015）とはまったく異なり、そこには何かしらの方向性を想定しているわけでもなければ、決まった段階を予測しているわけでもない。きわめてシンプルに、文化集団の歴史的動態を明らかにしたいというだけである。これが現代の文化進化研究であり、こうした文化集団の動態を歴史的に明らかにするためには、数理的手法が一定の効力をもつ。その理由の一端は、すでに述べた通りである。

第2章、第3章の手法は、形態測定学と呼ばれる分野で発展してきた（その数学的詳細や具体的な適用方法は補遺を参照）。この手法は生物のかたちを計測するために開発されたが、そもそも前提として、（一定の条件を満たせば）生物以外の対象にも拡張できる。そしてさまざまな対象のかたちに関して、大量のデータを取得・解析できる利点をもつ。また第2・3章の考

察とも、遠賀川式土器と前方後円墳に関して、日本考古学でこれまで提案されてきた従来の仮説を定量的に検証する側面もある。

第4章の考察も同様に、日本考古学での仮説、そして近年世界的に注目されている主張を検討することが目的である。手法としては古人骨のデータを各地域・時代（縄文・弥生時代とヨーロッパ中石器時代）で収集し、時代・地域ごとに統計的な検定を行っている。

第5章では生物学と考古学の歴史的關係が論じられる。たしかにモンテリウスの文章からは、ダーウィンのな進化論よりも比較形態学の雰囲気が強く感じ取れる。また、彼のアナロジードどこまでうまくいくかについては考古学の中でもたびたび論じられており（近藤他 1985）、生物学的手法が考古遺物に対し、無批判に適用できるわけでもない。しかし、第1章でも述べられた通り、両者の間に何かしらの類似点があり、進化という観点から、数理的手法によって考察できる可能性は残されている。むしろ三中说が言うように、生物と考古遺物、ひいては人工物を全体を包含できるような進化フレームワークが必要なかもしれない。

考古学という営みもまた、文化進化の対象である。日本考古学という研究者集団による文化的営みが、考古遺物の文化進化研究によってどのように変化していくか。本書のような試みが時間をかけて文化的子孫系列を残し、日本考古学に広まっていけるかどうかは定かではない。しかし、日本考古学というある種の文化集団が岐路に立たされている今（それにさえ気づけないなら、もちろん将来などありはしない）、何かしら考え直すきっかけにはなりうるだろうか。

参考文献

- 小沢一雄 1978 「前方後円墳の形態研究とその計数的方法の試み」『考古学雑誌』25(2)、29-46頁。  
及川昭文 1985 「考古学データの数量的研究」近藤義郎他(編)『岩波講座 日本考古学1…研究の方法』岩波書店、273-300頁。  
クリーブ・オルトン 1987 「数理考古学入門」雄山閣(小沢一雅・及川昭文訳)。  
梶原洋・阿子島香 1981 「頁岩製石器の実験使用痕研究(ポリッシュを中心とした機能推定の試み)」『考古学雑誌』67(1)、1-36。  
川西宏幸 2015 『脱進化の考古学』同成社。  
近藤義郎他(編) 1985 『岩波講座 日本考古学1…研究の方法』岩波書店。  
須藤隆 1973 「土器組成論——東北地方における初期稲作農耕社会成立過程究明のための基礎的研究」『考古学研究』19(4)、62-89頁。  
寺田和夫 1963 「統計的方法」江上波夫・水野清一(編)『世界考古学大系16…研究法・索引』平凡社、136-142頁。  
埴原和郎・岡村道雄 1981 「墓に副葬された石鏃に関する統計学的検討」『人類学雑誌』89(2)、138-143頁。  
藤尾慎一郎 2002 「瀬戸内における遠賀川系甕の成立過程…弥生土器瀬戸内起源説の検証」『環瀬戸内の考古学』古代吉備研究会、283-312頁。  
藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析による古代栽培植物遺物の探索」『考古学雑誌』62(2)、148-156頁。  
広岡公夫 1976 「古寺伽藍中軸線方位と考古地磁気(日本における磁石使用の起源について)」『考古学雑誌』62(1)、49-63頁。



文化進化の考古学

—

目次

はじめに ——— 中尾 央・松木武彦

i

第1章 現代的な文化進化の理論

井原泰雄

1・1 文化進化 2

1・2 中立的な文化進化 8

1・3 適応的な文化進化 19

1・4 結論 29

第2章 遠賀川式土器の楕円フーリエ解析

田村光平・有松 唯・山口雄治・松本直子

2・1 土器の文化進化研究 36

2・2 弥生時代のはじまりと遠賀川式土器 41

2・3 解析手法 48

2・4 解析結果と考察 51

第3章 幾何学的形態測定学による前方後円墳の墳丘形態の定量的解析： 63

田村光平・松木武彦

3・1 前方後円墳の文化進化 64

3・2 方法と分析 70

3・3 数理的アプローチによる古墳研究の今後 82

第4章 戦争と人類進化——受傷人骨の視点から：……………

中川朋美・中尾央

89

4・1 戦争と進化 90

4・2 縄文時代における戦争 98

4・3 弥生時代における戦争 103

4・4 ヨーロッパ中石器時代における戦争 109

4・5 戦争と人類進化——戦争の（歴史的）原因の究明に向けて 115

第5章 考古学は進化学から何を学んだか？……………

三中信宏

125

5・1 文化系統学曼荼羅再訪——ロジックとグラフィックのはざままで 126

|     |                           |     |
|-----|---------------------------|-----|
| 5・2 | バシユフオード・デイーンの考古学的系統ダイアグラム | 131 |
| 5・3 | オスカル・モンテリウスの型式学と比較形態学     | 136 |
| 5・4 | 文化構築物形態の数理と統計学——もう一つの並行性  | 146 |
| 5・5 | 普遍的な文化体系学をめざして            | 150 |

おわりに ——— 中尾 央 166

補遺 幾何学的形態測定学とRを使った解析例 ……………

野下浩司・田村光平

216

|       |     |
|-------|-----|
| 索引    | 220 |
| 執筆者紹介 | 224 |

おわりに

中尾 央

### プロジェクトの経緯

各章でも触れられている通り、本書は日本学術振興会の「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業『歴史科学諸分野の連携・総合による文化進化学の構築』」（代表・井原泰雄）という研究プロジェクトの、三年間の成果をまとめた一冊である。文化進化学にここまで特化した研究プロジェクトは国内では珍しく、よく言えば挑戦的、悪く言えば正直無謀なプロジェクトである。少なくとも、最初の研究会や各種打ち合わせで、私が「若手の無茶に付き合ってもらおうプロジェクトです」となれば冗談で言っていたくらいには、その無謀さを自覚していた。いつものことながら、巻き込まれてしまった関係者各位には本当にお詫び・お礼のほかはない。もちろん、それは今後さらなる無茶をお願いすることで換えさせていたきたい。

正確な時期は覚えていないのだが、二〇一三年の終わりか二〇一四年のはじめ頃だっただろ

うか。本プロジェクトの協力者である田村光平さんから連絡をいただき、当時の勤め先である総合研究大学院大学まで、田村さんと有松唯さんにお越しいただいたのがきっかけだった。裏を明かしてしまえば、有松さんが文化進化絡みのプロジェクトを立ち上げようと考え、広島で開催された人間行動進化学会で田村さんを捕まえ、ついでに私も捕まえようとしたが私は見事に逃げ切つてしまい、直接総研大まで来ざるをえなくなつたらしい。総研大の研究室で、「機会を見つけ、文化進化関連の研究プロジェクトを立ち上げてやろう」と話が盛り上がったのを覚えてる。

その後すぐ、日本学術振興会から先導的人文学・社会科学研究推進事業について連絡が届き、早速挑戦してみようということになった。そして本書の寄稿者に話をもちかけ、また井原さんに代表をお願いして引き受けてもらい、研究費を申請することになったのである。正直にいえば、私個人はまさか申請が通るとも思っていなかった。公募テーマが「行動・認知・神経科学の方法を用いた、人文学・社会科学の新たな展開」という、よくよく考えてみれば「、」の後ろ以外は本研究内容とはあまり関連のないテーマだったのだ。申請書には、歴史を扱うプロジェクトなので、神経科学ではなく考古学が入るといふ文面を入れた記憶がある。しかし、二〇一四年の九月に運よく採択通知を受け取ることができた。その直前、この研究費が通らなかつた場合のことも考え、岡山大学の松本直子先生、そして同時に松木武彦先生にも相談をもちかけるべく、鳥取県大山の岩伏し遺跡まで打ち合わせにうかがつたことも鮮明に覚えている。

何より山陰は魚が旨かった。岩伏し遺跡には去年再訪問し、今度は発掘を手伝わせていただいた。結果、私は筋肉痛で死にそうになった。

ともあれこの研究プロジェクトには松本先生（と岡山大学の山口雄治さん）にもご協力を仰ぎ、とくに遠賀川式土器の研究に参加いただいた。ほかにもさまざまな方々にご協力いただいている。土器の楕円フーリエ解析を進めるなかでは、まさに理論形態学がご専門の東京大学の野下浩司さん、古人骨・受傷人骨関連の研究の研究では岡山大学大学院博士課程の中川朋美さんがいろいろとお手伝いくださった。さらにお手伝いだけでなく、野下さんには補遺として、数理的手法の解説のご寄稿をお願いした。また中川さんには、気がつけば私がやるべき作業をほとんどかわりにやっていたいただき、最終的には、日本の古人骨に関してかなりのデータを集成することができた。また本書では諸事情により、残念ながら有松さん単独でのご執筆はかなわなかったが、いずれ関連する研究成果を発表してくださることと思う。

### 日本における文化進化研究と本書の位置づけ

私個人が文化進化に興味を持ち始めたのは、まだ博士課程在籍中の二〇〇七年前後だった。人間行動進化に関心があり、その流れで文化進化についても調べるようになった。そのころの文化進化研究はほとんどが理論的研究で、実際のデータを使った研究はあまりなかったように記憶している。その点については第1章でも触れられているし、事実、当時はよくそう揶揄

されていた (e.g. Cronk, Irons, and Chagnon 2000; 中尾 2015)。国内で実際に文化進化研究に関わっていた研究者はその井原さんや、名古屋大学の有田隆也さんたちなど、数理系・（とくに言語進化の）シミュレーション系の方々が中心で、北海道大学の竹澤正哲さんのような心理系の方は、かなり例外的な存在だったように思う。

その後、本研究プロジェクトのメンバーでもある農業・食品産業技術総合研究機構の三中信宏さん、そして今回も編集をご担当いただいた勁草書房の鈴木クニエさんをそのかし、さらにいろいろな方を巻き込んで多大なるご迷惑をおかけしながら出版できたのが『文化系統学への招待』（二〇一二年）である。当時、東京大学の長谷川寿一先生の研究室にトーマス・E・カリーという、世界でも数少ない文化系統学の研究者が在籍していたのも後押しになった（彼も『文化系統学への招待』にはご執筆いただいた）。日本人による初の文化進化本を出版できたという意味で多少なりとも意義があったのではないかと、小指の先ほどのちよつとした自負を感じつつ、いつものことながら、実際のところは「若いつてすごいな、お前、世間知らずだろ」という反省が大半を占めている。そして結局、本書が日本人による二冊目の文化進化本ということになるのだろうか。もちろん、研究成果自体はさまざまな論文で発表されている。

しかし近年、日本でも文化進化への注目度は徐々に高くなりつつあるようだ。アレックス・メスーディの『文化進化論』（NIT出版、二〇一六年）は評判も高く、よく読まれているらしい。また関心をもつ研究者や学生も徐々に増え、関連する分野の学会でも文化進化方面の講演



を聞く機会が増えた。海外では文化進化研究の学会組織もでき (Cultural Evolution Society, e.g., Brewer *et al.* 2015)、徐々にその勢いは強まっている。また、心理学、人類学、考古学などの関連分野においても文化進化研究がさらに浸透し、裾野が広がりつつある。たとえば第2章や中尾 (2011, 2012) でも触れられているように、考古学であれば石器や鏃などに関して、形態測定や系統推定の観点からさまざまな研究が蓄積されてきた。先のカリイもイギリスで Seshat (<http://seshatdatabank.info>) というプロジェクトを始め、第2章にあるようなコーディングを行いつつ、さまざまな国の先史・歴史データを収集し、定量的な解析に使えるように整理している。

本書の特徴は、こうした流れのなかでもとくに、考古学との関連で行われた研究を紹介している点である。いくつかの章で触れられているように、考古遺物を対象とした文化進化研究は徐々に広まりつつあるが、当然ながら日本の考古遺物を対象にした研究はほとんど見られない。しかし、日本考古学のデータは海外に比べてもきわめて豊富かつ充実しており、このデータを十分に活用すれば、これまでなされてきた研究よりもはるかに充実した成果が得られるのではないだろうか。そう考えたのも、この研究プロジェクトを開始するきっかけの一つである。

また、考古遺物のデータにはほかの点でも文化進化研究にとって重要な意味がある。たとえば心の進化を考えようとした際、当然ながら数百万年前のヒトの心を直接研究することはできない。数百万年前の心、もしくはそうした心をもった生き物は現存しないからだ。もちろん、

ある程度であれば、チンパンジーやボノボのような最近縁種から過去を推測することはできない。しかし、これらの種をヒトの過去を直接反映するものとみなすことはできない。両種ともヒトと分岐してからの数百万年で、かなり独自の進化を遂げてきたからだ。ボノボはチンパンジーより平和的な種であると言われがちだが、両者が分岐したのも二〇〇万年も前である。

他方、考古遺物は（うまく残っていれば、あるいはうまく復元できれば）当時のままの姿を残している。つまり、遺物を直接考察できるのである。これは心や言語などの「形」を残さない特徴に比べ、研究対象として大きな利点となる。もちろん、データの残りやすさは地域や遺物の種類によって異なる。たとえば土壌が強い酸性であれば、人骨は残りにくいし、土地の酸性度合いは地域によって異なる。弥生時代の話で言えば、北部九州の人骨は甕棺と呼ばれる埋葬具のなかに収められており、直接土壌に埋葬された場合よりも人骨の残りがよい。弥生中期の北部九州で人骨が多数出土するのは、これも理由の一つだろう。考古遺物を検討していく場合、こうした偏りを考慮した上で研究を進めなければならない。

本書はその考古遺物として古人骨・受傷人骨、土器、古墳を取り上げた。第4章は古人骨に基づいた研究で、内容自体はいくつかの雑誌に投稿した論文を整理しなおし、統合したものである。とくに縄文時代のデータに基づいて発表した論文は、『バイオロジー・レターズ』(Biology Letters) という生物系では比較的著名な学術誌で受理され、また成果についてプレスリリースを作り、記者発表も行った (Nakao *et al.* 2016)。結果として、この論文は国内の各種新聞

やメディアのみならず、とくにワシントンポスト紙 (Kaplan 2016) や『ネイチャー』といった著名メディアでも紹介されるなど、海外でも大きな反響を呼んだ。縄文時代のデータだけで、さまざまな国のデータを集めて議論している先行研究の半分ほどの数に相当し、かなりのインパクトがあったと考えられる。しかし、紹介のされ方を見ると、日本のデータをもちいた研究である点も大きかった。この論文にどれだけの価値があるのか私自身はまだよくわかっていないし、今後の研究次第で価値は変わっていくとも思うが、日本考古学のデータが国際的に大きなインパクトを与えていることは、身にしみてよくわかった。

第2、3章では遠賀川式土器と古墳、とくに前方後円墳が取り上げられている。土器に関してもこれほど充実したデータを蓄積している国はそれほどない。第2章でも簡単に触れたが、日本考古学は土器の型式分類・編年の作業に（とくに他国から見れば）信じられないほどの熱意を注いでいる (e.g. Ikawa-Smith 1982)。その評価は別の機会に論じるとして、少なくとも土器データ・分類の充実度は他に類を見ないことは間違いない。古墳も同様で、第3章で紹介された先行研究では主に数理的手法が使われていたが、古墳形態の型式分類・編年研究も山のように出版されてきている (e.g. 近藤1992-2000)。データそのものについても、二次元の測量図であればすでにさまざまな集成がなされており (e.g. 宮内庁書陵部陵墓課 1999)、自由に利用できる。土器と古墳についてはまだ研究内容を海外の雑誌に投稿できていないが、人骨の研究と同様、インパクトを与える可能性は十分にある。さらに、今回の研究内容は遠賀川式土器だけ

でなく、ほかの土器、あるいは武器・石器やその他の考古遺物にも拡張が考えられる。実際、現在その可能性を模索しているところである。

\* \* \*

本書がプロジェクトの研究成果をまとめた本であることからわかるように、本プロジェクトはこれでいったん終了である。このプロジェクトがどこまで成功したのかは、読者の方々、周囲の方々の判断に委ねるしかない。実際、すでにいろいろなご批判を耳にし、また直接ご意見いただいたことも多い。それはありがたいことこの上なく、アカデミックな場面・意味で炎上するのは、研究者にとって至上の喜びである。

たとえば、よくいただく批判の一つに「報告書だけに依存した研究で大丈夫なのか」がある。報告書だけでなく、考古遺物の現物も見なければならぬという意味であれば、十分に理解できる批判であり、まさにその通りとしか答えようがない。後述するように、二次元の実測図には大きな限界がある。本書の大部分でなされている研究は、現物を見ることの重要さを理解した上で、これまで蓄積されてきたデータを十分に活用しようとしている。しかし、報告書の記載だけでは信頼できず、そこに依拠した研究には価値がないと言われるのであれば、一言くらいは反論しよう。「そんな信頼もできないものを税金使つて出版しているんですか」と。さまざまな（とくに人的・時間的）限界を理解した上で、現状何が最適なのか考えておく必要がある

るだろう。

もちろん、実際のところどの研究もまだまだ途上段階である。遠賀川式土器の研究は解析対象となる土器をさらに拡大する必要がある。古人骨の研究についても、言ってしまうえば数を数えて検定しただけだし、古墳の解析も、より多くの古墳を対象にして、さらにまとまった考察ができるだろう。加えて、土器と古墳に関しては、いずれ三次元データを対象にして、考察を進めなければならぬ。現在入手できる二次元データは、観測者の主観が入り込む余地を大きく残してしまっている。こうした残された作業に関しては、今後も関連プロジェクトで継続していくべく、準備を進めている。ただ個人的には、(一定の研究成果はもちろんのことながら)さまざまな展望、そして今後の方向性や、さらには考古遺物を対象とした文化進化研究の可能性や限界も見えてきたことが何よりもうれしい。

また、こうした(少なくとも審査時には)挑戦的か無謀かもわからないような研究プロジェクトを採択していただいた、日本学術振興会にも感謝のほかはない。研究成果を継続的に出し、生き残っていくためには、真面目かつ穏当な路線ももちろん大事である。だが、より面白く、なおかつ重要な成果をめざすのであれば、一見すれば無謀な目標を狙っていくことを肝要とするだろう(もちろんある程度の勝算は必要である)。こうした「賭け」の重要性を理解いただいたというだけで、本当にありがたいかぎりである。

最後になったが、本書は各章の内容に関して関連研究者に査読を行っていただいた。年度末

の慌ただしい時期、しかもたった二週間という短期間での査読にご協力いただいた皆さまにはここで改めて感謝申し上げます。また、本研究プロジェクトの遂行にあたっていろいろなご助言、ご支援をいただいた方々にも、ここで再度お礼を申し上げておきたい。本来ならば全員のお名前をあげるべきかとも思うが、無用のご迷惑をおかけしないためにも、ここでは控えておこうと思う。

二〇一七年四月

#### 参考文献

- Cromk, L., Irons, W., and Chagnon, N. (Eds.) (2000). *Adaptation and human behavior*. Aldine de Gruyter.
- Brewer, J., Gelfand, M., Jackson, J. C., MacDonald, I. F., Peregrine, P. N., Richerson, P. J., Turchin, P., Whitehouse, H., and Wilson, D. S. (2015). Grand challenges for the study of cultural evolution? *Nature Ecology & Evolution* 1, 0070. (doi: 10.1038/s41559-017-0070)
- Nakao, H., Tamura, K., Arimatsu, Y., Nakagawa, T., Matsumoto, N., and Matsugi, T. (2016). Violence in the prehistoric period of Japan: The spatiotemporal pattern of skeletal evidence for violence in the Jomon period. *Biology Letters* 12, 20160028. (doi: 10.1098/rsbl.2016.0028)
- Nature Research Highlights. (2016). War uncommon in prehistoric Japan. *Nature* 532 150–151.
- Kaplan, S. (2016). A study of ancient Japanese bones might challenge our ideas about human nature.

おわりに

Washington Post, 2016/04/01. (URL: <https://www.washingtonpost.com/news/morning-mix/wp/2016/04/01/a-study-of-ancient-japanese-bones-might-challenge-our-ideas-about-human-nature/>)

Ikawa-Smith, F. 1982. "Co-traditions in Japanese archaeology." *World Archaeology* 13(3), 296-309.

宮内庁書陵部陵墓課 1999 『宮内庁書陵部陵墓地形図集成』学生社。

近藤義郎編 1992-2000 『前方後円墳集成』(九州、中国・四国、近畿、中部、東北・関東、補遺編) 山川出版社。

中尾央 2011 「文化とその系譜：文化系統学の(再)興隆」『科学哲学科学史研究』5、51-70頁。

中尾央 2012 「文化の過去を復元すること…文化進化のパターンとプロセス」中尾・三中(2012)、2-16頁。

中尾央 2015 『人間進化の哲学：行動・心・文化』名古屋大学出版会。

中尾央・三中信宏編著 2012 『文化系統学への招待：文化の進化的パターンを探る』勁草書房。